

第1章 漢方の症候分類（弁証）

病人の証候を弁別して正しい診断に至る作業を弁証と謂う。弁証は一定の手順で行う。先ず八綱により疾病の部位と性質、病邪と正気の盛衰を概括する。次に病邪弁証を行って、病の原因が外感熱病か或は内傷による雑病かを弁別する。外感性熱病であれば傷寒に属すものは六経弁証、温病であれば衛氣營血弁証或は三焦弁証に従う。内傷雑病に於ては、先ず血津液弁証を行いさらに臟腑経絡弁証を行う。（基礎編の気血水、臟腑、経絡の項を参照）

1. 八綱弁証

八綱弁証とは、病人の証を決定するにあたって、陰－陽、表－裏、寒－熱、虚－実という8種の基本綱目の4対の組み合わせに基いて、病状を分析帰納して正しい診断に至ろうとする方法である。八綱弁証は種類を問わずすべての疾患に応用することができる。

1) 陰 陽

陰陽という言葉はもともと日なたと日かげという意味であるが、「易学」の中に取り入れられて、森羅万象の両面性、相対性を示す言葉となり、歴史と共に東洋の思想に特徴的な観念として発展したものである。古代の人々はすべての事物や現象は、互に相対立する陰陽の二種の側面を持って存在することに気付き、これを陰陽学説という一つの哲学にまで高めた。陰陽は生と死、エネルギーと物質、精神と形体、天と地、昼と夜、男と女というように、互に対立すると共に、互に転化し循環し、補い合いながらあらゆる事物を形成する。陰陽が互に原因となり結果となりながら変化し発展して行くというのが陰陽論の中心的な哲学思想である。

陰陽の意義は広大無限であるが、医学の中で用いられる時は、大きく分けて次の三つの場合に用いられる。

(1) 生理作用の表示

人間には肉体と生理作用とがある。「陰」は人体の物質的側面、則ち肉体

を指し、「陽」は人体の生理機能を則ち働きを指す。気血に関しては気は陽、血は陰である。従って「陽証」とは機能的、エネルギー代謝的異常であり、「陰証」とは器質的、形態的異常を示す。この両者の人体における関係は、肉体（陰）があつて始めて機能（陽）が生じ、また気（陽）の働きによって飲食物の栄養分から肉体（陰）が形成されるという相互依存の関係である。「陰に従つて陽が生じ」と共に「陰は陽の器である」といわれる所以である。

(2) 疾病の病理的变化を示す

身体が持つ推進、温暖の働きをする気を「陽気」と呼び、滋養・潤滑の働きをする気を「陰気」と呼ぶ。

病勢が沈滞的で寒涼的なものを「陰証」という。現代医学的には進行性病変による細胞の変性萎縮壊死等で、それによる貧血や循環障害などである。従つて、悪性腫瘍、悪液質、老人性疾患等は陰証に属す。

病勢が亢揚的なものを「陽証」とする。現代医学的には炎症性疾患が代表的であるが、病氣に対し生体反応の亢進しているものは総て陽証である。

日本の伝統的な漢方に於ては陰陽はほとんど寒熱と同義語であり、陽証＝熱証、陰証＝寒証という図式が成り立って来た。

また陰陽は病気の部位や、病気の時期を示す。

病巣部位が体内に在るものを「陰証」といい体表に在るものを「陽証」とする。これは病巣部位の陰陽で、八綱では「表裏」を以て表わされる。

疾病の初期段階のものを「陽証」とし、進行し慢性化した段階を「陰証」とする。『傷寒論』の症候分類である六經弁証（後述）に於ては太陽病、陽明病、少陽病の三陽病は陽証、太陰病、少陰病、厥陰病の三陰病は陰証に属する。

(3) 人体における総ての相対的事物を表現する。

例えば男を陽とし女を陰とする。左が陽で右が陰である（逆のこともある）。頭を陽とし足を陰とする。背は陽で腹は陰である（四足動物では背が日光を受け、腹部がかげになる）。体表は陽で体内は陰である。実質臓器である五臓（心、肝、脾、肺、腎）は閉ざされているので陰で、管腔臓器である六腑（胆、胃、小腸、大腸、膀胱、三焦）は外気に接しているから陽